

第9章 都留の歴史 ―城下町としての都留

社会調査・地域調査 B 歴史班

メンバー： 源田明子 佐藤 祥 北村尚洋 小谷 朋 小林由佳 古宮宏美 佐賀直人 眞田綾香

序節 TEAM Valley Village

今、私たち（筆者）は“都留”という土地に暮らしています。普段何気なく暮らしていますが、この街がいきなりできたわけではありません。私たちが生きていて、過去・現在・未来があるように、この土地にも過去・現在・未来があります。それが「歴史」です。私たちは都留に暮らす住民のひとりとして、その歴史を知る必要があると思います。ここで何が繰り広げられ、どのように発展したのか…。ある人が言っていました、「過去のない未来はない」と。過去がなければ、現在も未来さえもないのです。過去を基盤として「今」があります。過去を知ると、何か活かせることがあるかもしれないのです。また過去を知ること、今まで目に入らなかった何かを、感じることでできなかった何かを見出すことができると思います。そうすれば都留という土地に対する見方が変わり、生活が楽しくなることでしょう。

この章では、「城下町としての都留」という視点に立って、都留の歴史を明らかにしたいと思います。この土地では、どんな人物が活躍し、どのような事業が展開されてここまで発展してきたのか、そして、人びとはどのように暮らしてきたのかということを調べてみました。

地名の「谷村」にちなんで、私たち「B 歴史班」は「TEAM Valley Village」の別称を名乗ることにします。それでは、早速調査報告にまいりましょう。不思議な過去の世界へ、タイムスリップ！

調査方法

文献調査（先行研究フォロー）

「ミュージアム都留」にて展示物観覧と資料閲覧

郷土史研究家へのインタビュー調査

活動記録

8月3,4日（火・水）	市立図書館にて文献調査
9月15日（水）	インタビュー調査の打ち合せ（A 歴史班と合同）
9月17日（金）	「ミュージアム都留」見学
9月24日（金）	インタビュー調査の事前準備（A 歴史班と合同）
9月28日（火）	インタビュー調査実施
10月3日（日）	報告書内容の構想と執筆作業の打ち合わせ
10月13日（水）	報告書原稿作成開始（毎日5限に学食にて）

インタビュー調査の実施方法

対象者： 都留市郷土研究会 武井一郎さん、武井さんご夫人
実施日時： 2004 年 9 月 28 日（火曜日） 15:00～16:30
場所： 「ミュージアム都留」資料室
質問者： B 歴史班 6 名（源田・佐藤・北村・小谷・小林・古宮・佐賀・眞田）
A 歴史班 6 名（石川・井口・大柴・大橋・河西・志村） 計 12 名

其の壱. プロローグ —— 「都留太郎」の災難

昔、山梨県の片隅の都留のある地に、わんぱく者で有名な「都留太郎」（仮称）という者がおったそう。彼はガキ大将で、村の子供を集めては悪さを働いておった。困った村人たちは寄り合いを開き、都留太郎にお仕置きを与えることにした。長老は都留太郎（仮）を呼び出し、村の一番古い蔵に閉じ込めた。

「出してくれ！オラ、暗いところはダメなんだ。」

都留太郎の叫び声を聞きながら、かわいそうだと思いつつも、懲りるだろうと思い、長老は蔵を後にした。

「ちくしょう！」

涙と鼻水でぐしょぐしょになった都留太郎は、どうにかして蔵から出ようと試みたがダメだった。

「オラ、どうしたらいいんだ…。」

そう呟いた時だった。蔵の奥から微かに光が…。都留太郎は光に導かれるように歩いて行った。

「な…、なんズラか、これは？」

都留太郎が見たものは、光る巻物だった。恐る恐る巻物を手に取り、震える指先でその紐を解くと、そこには…！？

其の弐. 秋元氏現る！！

都留はかつて、「谷村」（やむら）と呼ばれていた。はじめ、谷村の地を治めていたのは「小山田氏」であった。埼玉県秩父市一帯に勢力をもっていた一族が小山田（現在の東京都町田市）に移り住み、地名をとって「小山田」と名乗るようになったといわれている。小山田氏はこの地で勢力を伸ばし、都留周辺にも土地を持つようになったと考えられる。小山田氏の勢力は都留市域を中心として、現在の犬伏市猿橋周辺までを治めていたといわれる。金井にある桂林寺の南に建てた小山田氏の館は、享禄3年（1530年）に火災で焼け落ちてしまった。2年後の天文元年に小山田信有は、谷村に新しい館を造り、一族とともに移ったと文献には記されている。これ以降、谷村は郡内の中心地として発達した。谷村が選ばれた理由としては、南北を山や桂川に挟まれ、敵の攻撃から身を守りやすい土地であったことが考えられる。

天正10年（1582年）、武田氏が滅びた後、甲府盆地一帯に徳川家康、郡内には小田原の北条氏が進出した。徳川家康と北条氏とで争われた「黒駒の合戦」以降は、甲斐国は徳川家康の領地となり、黒駒の合戦で手柄をたてた鳥居元忠が都留郡領主になった。

天正18年（1590年）、豊臣秀吉の命令で、徳川家康は拠点を江戸に移し、甲斐国は豊臣秀吉の一族

で重臣である羽柴秀勝、加藤光泰、浅野長政がその領主となり、それに伴い、谷村にはそれぞれの重臣である三輪近家、加藤左内、浅野氏重が入った。谷村は関東の徳川家康に対する抑えとして重要な拠点と位置づけられていた。

「秋元家」は関が原の戦いに徳川氏の武将として活躍し、その功により慶長6年（1601年）に初代秋元長朝が上野総社（現前橋市）で一万石の大名となり、その子2代泰朝が「大阪冬の陣・夏の陣」の武功により、寛永10年（1633年）、谷村藩一万八千石の藩主となった。ここから秋元家の時代が始まる。

秋元氏のおもな功績として、泰朝公が日光東照宮の造営総奉行となり、陽明門をはじめとする現在の日光東照宮を造ったことが挙げられる（寛永の大造営）。また、2代富朝公は諏訪森植林（富士の雪解け水害の防止）事業を成し遂げ、3代喬知公は、累進し元禄12年（1699年）には徳川幕府の老中となり赤穂義士事件、幕府の制度改革、大奥の絵島生島事件など、幕閣として江戸時代の大事件に関係した記録がある。なお、谷村藩主三代を通じて行われた治水灌漑工事の谷村大堰（家中川・禾生用水）や殖産振興事業の織物業は、現在も都留市（旧谷村藩）発展の原動力となっている。しかし、「郡内一揆」の勃発が物語るように、秋元氏であっても谷村を治めることは容易でなかったことが想像される。

泰朝公は、なぜ日光東照宮の造営総奉行に指名され、それを請け負ったのだろうか。私たちのインタビューに対して、武井氏は次のように語っている。

秋元家はもともと、土木工事に長けていた大名だということが云われているそうです。「谷村大堰」を作った人でも有名であります。そういうことも影響しているのか、初代泰朝が日光東照宮の建築の総奉行になっています。しかし、ハッキリとした理由はどの文献にも記述されていないようです。

別な説としては、秋元家は徳川の譜代だといわれているそうです。ただ譜代大名のなかでも古い・新しいがあり、秋元家は新しいほうの譜代大名に分類されるようです。つまりは徳川の発祥した岡崎からではないけれども、関が原以前には家来になっていたということです。新しい譜代大名だということもあり、一生懸命に何か徳川家のためにやらなければならないということでやったのだらうという説もあるそうです。

その抜擢の理由としては、秋元氏が土木建築事業に長けていたということが前提にあるようだ。しかし、われわれ調査班としては、秋元氏が幕府に忠誠をあつく示していたという事情の方により大きな関心を抱く。この時代は徳川幕府の時代であったため、島原の乱以降争いごとがなく、そのために戦国時代とは異なり、功績をあげることが難しい世の中になってしまったと考えられる。そのなかで、泰朝一代で石高が大幅にアップしているのは、幕府から特別な恩寵があったからに違いない。

秋元家三代 略年表

年号（西暦）	内容
慶長5（1600）	関が原の戦いの後、東軍に味方した浅野長政・幸長は戦功により紀州和歌山37万石余りを与えられ転封となる。谷村城主、浅野左衛門氏重も和歌に映る。
6（1601）	鳥居成次、父、元忠の旧領地都留郡1万8千石の領主になる。
元和2（1616）	徳川忠長が改易となり、甲府城主となり、成次は忠長の家老職となる。郡内領主、

	鳥居成次没。子、忠房が父の遺領 3 万 8 千石と忠長の家老職を継ぐ。
寛永 8 (1631)	徳川忠長が改易となり、忠房も改易となり出羽山形へ。
9 (1632)	谷村在番に本堂伊勢守茂親、設楽甚三郎貞代
10 (1633)	2 月 3 日、秋元但馬守泰朝、3 千石増加され、上州総社から甲州郡内領 (1 万 8 千石) に入封。
11 (1634)	秋元泰朝、日光東照宮の大造営に際し、造営奉行を務める。
13 (1636)	秋元泰朝、十日市場から谷村に至る大堰 (谷村大堰) の開削に着手。
19 (1642)	歩行頭石野八兵衛氏照、茶壺を受け取りに甲州 (谷村) に来訪。 (「徳川実記」茶壺谷村保管の初見)
20 (1643)	泰朝没 (62 歳)。
慶安 2 (1649)	秋元富朝、北口本宮浅間明神の本殿、拝殿、幣殿を修造。
明暦 3 (1657)	富朝没 (48 歳)。養子 (外孫) 喬朝が継ぐ。
寛文 6 (1666)	喬朝、北口本宮浅間明神大鳥居を再建。 郡内農民の代表庄屋 2 名、谷村秋元氏役所へ小切租法適用による減租を歎願。
8 (1668)	郡内農民の代表 7 名、江戸の藩邸へ再び減租を歎願。
9 (1669)	秋元氏、寛文年間に家中の内職に郡内平 (夏袴) を織らせる。このころから織物が盛んに。
延宝 2 (1674)	今井堰 (上暮地、小沼)、梁尻堰 (新屋、松山、吉田、明見用水) を開削。
5 (1677)	喬朝、奏者番となる。
6 (1678)	喬朝、上吉田富士浅間明神本殿などを改修する。
9 (1681)	1 月 22 日、郡内農民代表 7 名、秋元氏の失政を江戸町奉行に越訴、同年 25 日、首謀者 7 名死罪。
天和 2 (1682)	喬朝、若年寄になる。
3 (1683)	松尾芭蕉、秋元家家老、高山伝右衛門の招きにより谷村に来訪。
元禄元 (1688)	喬朝、吉田に大鳥居を造営。
2 (1689)	喬朝、江戸城三の丸造営の総奉行を命ぜられる。
3 (1690)	喬朝、河口湖から剣丸尾の間 30 町の掘抜水道 (新倉掘抜き) 工事に着手。 お茶壺道中の甲斐国交通が止められ、勝山城への貯蔵が廃止。 (甲州街道史料)
4 (1691)	喬朝、下野国足利都賀郡内に 5 千石増加され、2 千 3 千石に。
7 (1694)	喬朝、7 千石増加され 3 万石となる。 松尾芭蕉、大阪の地に没す (51 歳)。
12 (1699)	喬朝、老中に任ぜられ従 4 位以下に叙せられる。
13 (1670)	喬朝、下野国足利都賀、河内国丹南、丹北四郡の内に 1 万石加増され 4 万石に。喬朝、侍従になる。
14 (1701)	喬朝、河口湖から剣丸尾への掘抜き工事は隧道の食い違いのため通水に失敗し、計画を放棄。
宝永元 (1704)	この頃、郡内織の縞、平織りに加えて綾織が考案。 喬朝、関東大震災による石普請を奉行した功により、1 万石加増され 5 万石に。喬朝、川越領主に。

2 (1705)	谷村藩、徳川幕府の直轄地となり、秋元家老、高山甚五兵衛宅を谷村陣屋とする。 谷村城を破却し、松平下総守信治、谷村在番を命ぜられる。 喬朝、谷村を引き払って川越城へ移る。その後、都留郡は清野与右衛門、町野惣左衛門の両人が支配。
3 (1706)	柳沢吉保、都留を預かり、長谷川六兵衛が代官に。
正徳3 (1713)	柳沢氏に預けられていた都留は直轄に戻る。
4 (1714)	喬朝没 (66 歳)。

(「都留歴史倶楽部ホームページ」より抜粋)

其の参. 人びとの暮らし

江戸時代、人びとは現在の国道 139 号線の南側に住んでいたとされる（ちなみに国道から北側、現在の谷村第一小学校周辺には秋元氏の家臣が住み、侍屋敷と呼ばれていた）。谷村を含めた郡内地方は山間の土地が多く、稲作に適していなかったため、古くから養蚕・絹織物業が行われた。郡内産の絹織物のうち、縞模様の入ったものは特に「郡内縞」（ぐんないじま）と呼ばれていた。郡内縞は、産地が江戸に近かったことなどから、値段が比較的安かったといわれる。また質も良かったことから、当時、縞模様の織物が流行していた江戸をはじめ、大阪などの大都市に住む一般の町人層に受け入れられた。郡内縞は各地へ移送・販売され、重要な収入源になっていた。江戸で郡内縞を扱っていたのは「越後屋」（現在の三越）だったが、あまりにも郡内縞の人気が高かったので、「少し値上げして売ってもよい」という指示が出されていたともいわれている。また絹織物に必要な藍玉や蚕種（蚕の卵）などは、地方から買い入れていた。

養蚕・絹織物の生産のほかに、狩猟・炭焼き・漆・桑などの栽培、木材・薪の販売などが行われており、なかには米の代わりに年貢の対象とされていたものもあった。このほか、おもに自家用として、麦・粟・稗・豆・野菜なども作られていた。

市内境の米山家に残されている「家業日記」によると、安永 10 年（1781 年）の 1 年間の家業の流れは次のようになっている。

(月は旧暦)

1～2 月	屋内で藁仕事（縄ない・筵織りなど）、山仕事・家畜の世話
3 月	芋・桑を植える、苗代を耕す、野菜の種まきなど
4 月	苗代へ稲の種まき、山での柴刈りが解禁
5～7 月	1 年で最も忙しい時期。柴刈り、麦刈り、田起こし、田植え、草取り、蚕の世話、畑仕事（粟・稗・大根の種まき）など
8～9 月	稲刈り、麦の巻きなど
10～12 月	材木の伐り出し、用水管理など

このほかにも女性たちは 1 年を通して、機に向かい、絹織物の生産に精を出していた。

其の四．お茶壺道中

「お茶壺道中」は、秋元氏が群馬からやってきた寛永 10 年（1633 年）に、幕府の公式行事として始まった。しかし、それ以前から私的行事としてお茶壺道中は始まっていた。江戸将軍が使うお茶は、「採茶使」（さいちゃし）という幕府の役人が、京都の宇治から毎年運んでくるもので、そのための行列のことを「お茶壺道中」といった。

お茶壺道中は、毎年 4 月から 5 月にかけて行われていたが、春に宇治で摘まれたお茶は、夏の暑さや湿気をさけるために、谷村の勝山城（お城山）にしばらく保存されて、涼しくなった季節に江戸へ運ばれた。お城山には、そのためのお茶壺があったと伝えられている。宝永元年（1704 年）、秋元氏が川越に転封になると、お茶壺道中は廃止された。

これに関連して、武井氏はインタビューでこう語っている。

「質問：お茶壺道中はいつから始まり、いつ廃止されたのか」

お茶壺道中は、徳川が江戸に移封されてから町づくりをはじめ、徳川の時代になったころ、非公式ではあるが行われています。やっぱり、一年を通して飲むお茶であるし、将軍が飲むお茶を宇治から運ぶためにそういう制度（「お茶壺道中」と呼ばれていたかは定かではない）があったらしい。それが寛永 10 年ごろ、初めて幕府の年間公式行事としてお茶壺道中が制度化されたようです。それまでは、将軍の私的なものであった…。

制度化されると、採茶使という人が辞令を受けて、宇治へ行ってお茶を持ってくるわけです。しかしいっぺんに 1 年分をもってきても、お茶が劣化してしまうので、飲む分だけは江戸へ持っていき、それ以外は比較的高冷地で涼しい谷村へ保存しようということになったのです。その当時には谷村には秋元氏がいましたし、「じゃあ、お茶を保存してもらおう」ということで委託されたのです。

お茶壺道中は幕末の明治維新まで続いています。秋元氏が谷村から川越（埼玉県）に移封されてからほぼ時期を同じくして、お茶は谷村には保存されなくなったそうです。その理由としては、経済的な問題があるといわれています。春に宇治から谷村へと運んだお茶を、もう一度、秋口に、江戸から谷村へ出向いて取りに行くことをしていると、幕府としても経済的負担が大きかったので、宇治から直接、江戸へと運ぼうということになったようです。

秋元氏が転封した後、藩主のいない谷村は幕領（天領）となり（それは幕末まで続いた）、そのため、勝山城や谷村城は取り壊され、人びとは侍屋敷を解体し、畑にした。しかし谷村はその後、幕府から遣わされた代官が治める代官所の中心として栄えた。現在、谷村第一小学校の前の、簡易裁判所のある場所には、郡内地域を治める代官の住宅が設けられ、「谷村陣屋」と呼ばれた。1,080 坪の敷地には、代官所、代官の住居である本陣、代官の下で働く手付（てつけ）・手代（てだい）が住む長屋があった。享保 7 年（1722 年）以降は、石和陣屋などの支所的役割を果たす「出張陣屋」となった。



其の伍. 都留市へと

秋元家が転封となり、谷村は主がいない天領となった。その後は、時代の流れにそって発展していった。1875（明治 8）年には、上谷村・下谷村が合併して「谷村」へ、四日市場・古川渡・川茂・小形山・田野倉・井倉村が合併して「禾生村」へ、川棚・加畑・平栗薄原・大幡・中津森・金井村が合併して「宝村」へ、上暮地・下暮地・小沼・倉見・境・夏狩・十日市場・鹿留村が合併して「桂村」へ、法能・玉川・戸沢村が合併して「三吉村」へ、小野・熊井戸・菅野村が合併して「開地村」へ、与縄・朝日馬場・朝日曾非雌村が合併して「盛里村」へと、それぞれ改名している（明治の大合併）。こうして、「都留市」が誕生する前は、「谷村町」「禾生村」「宝村」「桂村」「三吉村」「開地村」「盛里村」の 7 つの村が存在していた。それからさらに何回かの合併が行われているが、これらの村々が最終的に都留市へと改編・統合されたのは 1954（昭和 29）年のことである。

「都」に「留める」と書く「都留」の由来とは何なのであろうか。都留の地名は、「鶴がたくさんいた」、「富士山の裾野が植物の蔓のように伸びている」、「朝鮮語との関わりで、畑や平らな土地を『つる』と呼ぶ」などの由来から用いられるようになったといわれている。

其の六. エピローグ —— 素晴らしき発見

「う…ん…」

巻物から放たれた強い光を受けて気を失っていた都留太郎は、布団の上で目を覚ました。周りでは長老や大人たちが、心配そうに顔を覗き込んでいる。

「あっ、あっ、秋元公っ！？ 秋元公はっ！？」

「何を言っとるんじゃ？」

都留太郎はガバリと起き上がり、周りを悄然と見つめて叫ぶ。大人たちは「夢を見ていたんじゃないか」と笑っていたが、都留太郎は確かに覚えている。巻物から光が放たれて、そして過去の出来事を確かにこの目で見た。谷村の藩主が次々と変わり、人びとが住み始め、この谷村ができていく過程を…。

「あの巻物はっ！？ あの巻物をもう一度、見せてくれっ！」

都留太郎は長老へとせがみ、長老は「あれだけ怖がっていたのに…」と苦笑いしながら、閉じ込めた蔵へと連れて行く。

都留太郎は巻物を見つめた場所へと行くと、巻物は元の状態であった。恐る恐る巻物を手にとって紐解いてみたが…。

「…！？」

それには何も書かれてはいなかった。真っ白な巻物で、何かがかすかに書かれていたような痕跡はある。しかし、とうてい字など読めるほどではない。

「長老、これはっ！？」

「これか？ さあのう…、ワシにもわからんわい。」

「…。」

呆然としながら都留太郎は、冷静になって思い出してみた。それでも、過去へと逆戻りしたことは鮮明に覚えている。

「よしっ！ オラがこのことをみんなに伝えてやるっ！」

村の人に言っても信じてもらえそうになかったけれど、都留太郎はひとり心にそう誓ったのです。

終節. 私たちが伝えていくべきこと

私たち「TEAM Valley Village」は、実際に文献や資料を調べたり、インタビュー調査を行ったりして、都留の歴史について、少しだけですが、理解を広めた気がします。最初に訪れた都留（谷村）の印象は「田舎だ」という感じでしたが、しかし実はとても重要なところであったということに気付いて、驚きを隠せません。

では、何のために私たちは「歴史」を調べてきたのでしょうか。それは、「調べたことを、真実を、後生の人たちにも伝える」ためです。過去は実際に見ることができません。文献に記すことや語り継ぐことでしか伝えることができない貴重なものです。そんな歴史の一部を、自分たちの目で読み解き、耳で聞いたからには、私たちには、それによって知りえたことがらを伝える義務があります。調べて、「はい終わり」ということにはしたくありません。歴史を紐解くのは簡単なことではありませんが、それでも私たちはそのなかの、ほんの一部をみることができました。私たちの今回の調査は、まだ始まりに過ぎません。これからも谷村の歴史を掘り下げて、調査を続けていきたいと考えています。

参考文献・資料

高取堅二、1997、『碑が語る谷村藩士物語 ——秋元家臣の寺 円通院』円通院ミュージアム都留、「解説シート①～⑭」（館内展示物解説資料）

奈良泰史「都留歴史倶楽部」ホームページ（<http://www.geocities.jp/yasushinara/index.htm>, 2004 年 7 月 14 日）